

刊行にあたって

加國 尚志

立命館大学国際平和ミュージアム平和教育研究センター副センター長

『立命館平和研究』第22号では巻頭特集として「基地に向き合う市民社会」と題して、戦後日本における基地の問題についての論文を掲載しました。国際平和ミュージアム平和教育研究センターでは研究プロジェクトとして「自衛隊基地の地域社会史」の研究が進められています（代表：番匠健一客員研究員）。このプロジェクトでは戦後日本における自衛隊基地の存在が地域社会にどのような影響を与え、住民たちはどのように基地の存在に向き合ってきたのかということの調査研究が行われています。

戦後の日本は平和憲法によって武力放棄したとはいっても、自衛隊は厳然と存在しており、日本の各地には自衛隊基地が存在します。そしてそうした自衛隊基地の中には戦前の日本軍の基地であったところもあります。そうした基地の存在、そして反基地闘争の市民運動や、あるいは基地と共存せざるをえない市民の生活はどのように受け止められているのか、こうした側面は戦後日本の歴史を考える際に、戦後の日本の社会における自衛隊とはどのような存在であったのかについて重要な示唆を与えるものと思われる。自衛隊の存在は軍事的・政治的な観点だけではなく、自衛隊を取り巻く市民社会のあり方や自衛隊員の生活、そして基地のある社会の歴史という観点からも考察されねばならないでしょう。

その他、論文として村本邦子氏、河野暁子氏によるチェルノブイリと福島ミュージアムの比較検討を掲載しました。東日本大震災と福島原発事故から10年を迎える今年、その惨事の記憶をどのように歴史にとどめ、継承していくかという課題について、チェルノブイリの事例との比較から批判的な視点も含めて考察されています。この他にも、今回はたいへん数多くの論文応募があり、その中から選ばれた論文が掲載されています。

また調査・研究として、番匠健一氏・大野光明氏による「ハンパク」運動についてのインタビュー記録が掲載されています。これは1970年の大阪万国博覧会へのカウンター行動として万国博覧会開催に反対する博覧会が開催されたことの記録を調査したものです。戦後の市民運動のユニークな記録となっています。「ハンパク」については2019年にミニ企画展示「ハンパク 1969 —反戦のための万国博—」が開催されました。平和教育研究センターにおける研究・調査と展示の結びつきを示すものと言えます。

最後にコラムとして清水郁子氏による「みて、かんじて、かんがえた南京」が掲載されています。

2020年度秋の特別展は、コロナ対策の渦中ではありましたが、「CITY&PEACE 南京国際平和ポスター展」として開催されたことも最後に付け加えておきます。